

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	幻滅
Author(s)	松井, 武夫
Citation	龍南, 201: 105-118
Issue date	1927-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8944
Right	

幻滅

松井武夫

遅い朝飯を食べ終ると、私はぶらりと宿屋を出た。黄色い秋の日射しが狭い街路の上に落ちてゐた。外に出ると知つた人に出會ふ不安がはげしく起つて來た。そのくせに私は別に行く目的地などは持つてゐなかつた。たとへ今日哲子に逢へなくても又、いくらかの危険が伴つてゐても、宿にすつこんでゐるよりは外の空氣が吸ひたかつたのだ。危険に對する好奇心が幾分手傳つてはゐたが――。

とうとう私は、小學校の運動場に出でしまつた。小學校の野球の會があるので、思ひがけない人出がしてゐた。グラウンドの周圍を取りまいてゐる人垣が、青い空の下に、黒くはつきり見えてゐた。ぼんやりとその中に割り込んで見てゐたが周圍に對する警戒が、たえず私の心を落ちつかないものにした。知つた人がそして或ひは父の顔まで（そんな事は絶体にないと一方肯定しながら）がこの黄色く並んでゐる顔の群の中にまじつてゐそつた。――

昨夜、この市に着くとすぐに驛から、S女學院の音樂會へ行つた。講堂ではちらと哲子と顔を合せただけ、そしてその歸りに五分ぐらい話す機會が與へられただけだつた。この前に歸つて來た時、哲子の事でごたごたが起つて父が驛まで見送り（あの意味の監視で）に來てくれた事がある以上、今度の歸郷は公然と家に歸るわけに行かなかつた。昨夜の十二時がすぎてから私は俵屋に致へられて、宿屋の戸を叩いたのだつた。――

と、誰かゞ軽く肩をつゝいた。はつとしながらふり返ると、知つた顔が立つてゐた。あまり親しくなかつた中學の同窓の一人だつた。それでも軽い胸さわぎを感じながら、口を利いてゐた。

「運動會で學校が休みだから、ちよつと歸つて見た。」これだけ言ふのでさへ、家には歸られず、宿屋なんか泊つてる私自身を省る時可成り心が痛かつた。アブノーマルな事をしてゐるといふ意識がともすると自身をみじめにし、ひげめを感じさせた。ぼつりぼつり口をきいてゐる中に、話が絶えてしまつた。その男は立去つたが、私は尙そこに立ちつゞけてゐた。心の動きのとれないと言つた感じだつた。昨夜來の寢不足が、見えるものの、輪廻をいつのまにかぼんやりとさせてゐたりした。一人の知つた顔に逢つたと言ふ意識がだんだん私を不安にさせて行つた。若し父にでも會つたら——私はそこにゐるのが怖しくなつた。私は學校の裏の丘に行く氣になつた。人込みがどう思つても怖しかつた。そんな事に今更びくびくしてゐる自分が不愉快になりながら、私はこそそこそと人中をくゞつて行つた。丘の上に来ると、急に靜かになつてゐた。校舎のかけにかくれたグラウンドから時々拍手や喚聲が聞えて來る他には物音がなかつた。草の上に腰を下すと、港の町が目下に見えた。迫つた兩岸の間に海峡の水が所々、水脈を光らせながら流れてゐた。その上を忙しそうに走つてゐる、大小の汽船が絶間なく笛を鳴らしてゐた。その笛の音が思ひがけない様な大きい反響を山の多い市に残したりした。ゴーと朝の町から起る騒音が、この丘の靜けさの中に手に取る様に聞えた。車の動く音——叩く音——俥のベル——豆腐屋の笛——それがはつきりとその中にまじつてゐた。

自分の心持と、眞下の町で行はれてゐる色々ないとなみとがどんなにかけはなれてゐるか——それが頻りに思はれた。「これでいゝかしら」私の心はたえず叫んでゐた。「だが、この夢だけはすてられない、俺がどんなにみじめな人間になつても。」甘い感傷に浸りたい心がしきりに起つて來た。哲子に逢ひ度くなつた。併し哲子は今日は外出できないかつた。日曜日は彼女の父が勤めに出ないので、一日父の側にゐなくてはならなかつたから。明日まで待てばいゝのだつた。けれど、今の心はそれができるなかつた。「たとへ話は出來なくても、顔ぐらゐは見れる」と思ふと、私は哲子の家の近所まで行く事にした。ごたごたした裏通りを古い記憶から拾ひ出しながら、なるべく人に逢ふのを避けた。

哲子に逢つてどう——と言ふ事はなかつた。離れてゐる不安に堪えきれぬやうになつた時、私はもう故郷の町へ歸る汽車に乗つてゐたのだつた。對岸の故郷の町の廣告燈の明滅が夜空に見え始めた時、さすがに心が咎めた。連絡船に乗つてしまつた時は、もうどうにもできない自分を感じた。その夜、女學院の音樂會に出る、洋行歸りの聲樂家夫妻が偶然全じ船にのつてゐたのを見。もう自分の前に開けてゐる道は一つきやない、こう思つてしまふと自分自身がたまらなくいとしまれた。逢へばいい——六時間も、汽車にゆられたのもたゞそれだけだつた。その他のことを考へるとおそろしくなつた。——

裏通りが蓋きるとどうしても大通りに出なければならなかつた。今まで數知れず歩いたこの道を、こんなに變つた心持で歩いてゐるのがたまらなくさびしかつた。そして太股でゆく自分の制服姿が次々に店の硝子戸や飾窓にうつるのが何となく恐ろしかつた。いつのまにか汗がしつとり額に感じられた。二町も行くと漸く哲子の家のそばまで來た。高ききづいた石垣の上にあるその家は二階だけが下の道から見えた。あるひはと思つてゐた正面の磨硝子の障子はびつたり閉ぢてあつた。どこからか哲子のぞいてゐる様な氣もしたが、私は意氣地なく通りすぎてしまつた、若しかピアノでもと思つて耳をすましながら——勿論それも聞えて來なかつた。その道はまつすぐに×園といふ古い植物園の前につゞいてゐた。私はその門をくゞると、植物園のすぐ後に迫つてゐる小高い丘の上に登つていつた。春になると、丘の櫻が咲いて相當に賑はふのだつたが、今はひつそりして人一人見えなかつた。頂きの台地の上に一面に茂つたクローバが、晝近い陽の下に青々と照りながら、歩くとしゆくしゆく靴の下で鳴つた。台地がなだれて崖になる端に立つてゐる可成り大きい石の常夜燈の下に、それに依りかゝりながら私は立ち止つた。そこからは、二町あまり向ふの小山との間に食ひ込んで長く擴つてゐる町の屋並みが眼下に見わたされた。そして哲子の家は真正面に向ひの山の下に見えてゐた。

石垣の上に築かれた塀ごしに見える庭に暖かそうな日射しがこぼれて、庭木の影が砂の上にうつつてゐた。椽側の硝子戸が一所開いてゐるが、家の中は急に暗くなつて人影がなかつた。哲子の部屋のある離れの間は白く光る庭の櫻の枝にさへぎられ

て見えなかつた。あの家の中に哲子がゐるのに聲もかけられないのがもどかしかつた。哲子は自分がこゝに來てゐることを知つてるかしら。知つてゐてほしい。二人がこんなに近くにゐるのに知らないなんて、悲惨だ……こんな事を止めなく思ひながら私はぼんやりとその家を見つゞけてゐた。この市の山の手とでも言へるその一帯の町の上に朝の静けさが流れてゐた。どこかで石を切る音が山と山との間に木だましてゐた。私は段々大膽になつて來た。今度は燈籠の段の上に立ちあがつて、もう一度ちつと家を見てゐた。その時二階の硝子戸の中で人影がうごいたと思ふと、哲子の姿が椽に現れた。斜に陽をうけて白い顔は、ぢつとこつちに向けられたまゝ動かなかつた。私は思はず帽子を脱いで振つた。哲子はしばらく見續けてゐたが、こうするとすぐ解つた様にかかるく頭を下げた。二町も離れたこゝからは勿論、哲子の顔の表情なんかは見えなかつたけれど、私はたゞその体の動作で哲子がどんな事を言つてるかを一々想像するより他にしかたがなかつた。哲子はしばらくぼんやり立つてゐたがやがて部屋の中に入つて坐蒲團を五六枚持つてくると、硝子戸を二三枚開いて、手欄の上に乾す様に折りかけた。それから手欄に沿つて廊下を往つたり來つたりしながら、私の方から視線を放さない様にするのだつた。時々後の間や、下の庭に注意をくばりながらまたこつちに白い顔を向けるそのおどおどした様子がたまらなくいとしかつた。何て女らしいやり方だと思ふとひとりでに微笑がうかんで來た。私はすつかり満足してゐた。やつぱり逢へたんだ、もうそれでいいと思つたけれど哲子がこつちに向いてゐるのを見ながら、そのまま立去るのはつらかつた。哲子が姿を消すまでこうしてゐよう——そう思ひながら私は燈籠の上に立ちつゞけてゐた。階下には人の姿が見えなかつたし、よし人が居ても燈籠の日陰になつとゐる側に立つてゐるのだから見付かるおそれはなかつた。遠くでお互ひの顔の表情がまるでわからないのが今更はがゆかつた。哲子は時々、平靜を紛ふ爲か部屋の中に入つて行つたが、その時私はそこをはなれる事ができなかつた。そして何時の間にか望遠鏡を持つて來た様だつた。それをしばらく眼にあて、はまたはつして、「ほんとにすみません。逢へなくて」と言ふ様に頭を下げるのがよく見えた。そんな所に望遠鏡など持ち出してゐるのが彼女らしくて面白かつた。と、庭を注意する爲に哲子が手欄によりかゝ

つた途端、一枚の蒲團がするすると手欄からはづれて屋根から庭の上に落ちた。はつとした時、「まあ——馬鹿ね」とよく哲子が言ふ様に袂を口にあてながら笑つたり？した。私は愈々そこから離れたくなくなつた。二階に居ることを覺られない様にこつそり廊下を歩いてるのまでわかるのがたまらなくいやらしかつた。

「俺はこんな瞬間が得たい爲にわざわざ、親にも知らせずに歸つて来たのか？ そうだ、そしてそれでいいんだ。強くなれば自分の行爲はどこまでも肯定して行かねばならぬ、無論それに對して責任も持つ。が俺はこんなに喜びを感じてゐるではないか、この喜びまで否定できるものか、他人が俺達の行爲を見るから悪く？なるんだ、個人がその運命を享受して行くのがどうしていけないんだ、たとそれが他人の運命に少しでも不自由を興へる時、その行爲は充分に批判されるだらう。併し、今の俺達の行爲がどれだけ他人に干渉を持つてるか、この喜びがどれだけ他人に不自由を感じさせてゐるか、俺達は他人の運命に交渉しないと同様に俺達の運命をも拘束してほしくない。何が考へる事がある。このまゝに肯定していいではないか、もつと強くなるんだ、哲子があんなに見てゐるじやないか……」ぼんやりと哲子の顔を見ながら何時の間にか私はこんな事を思つてゐた。哲子との交渉に満足してゐる自分の他に、今一つの自分がこんなことを囁くのがまたさびしくなつた。どこまで煮え切らぬ男だ！ 嫌悪が自分自身に感じられて来た。今哲子の視線を感じながら、その白い顔がこつち向けられてゐるのを目の前に見ながら、ともすると自分自身にふり返へらうとするのがくやしなつた。「哲子！ 今僕がこんな卑怯な事をしてゐるのをあなたは知らないんだらう。あなたがそんなに僕の方を見てゐてくれるのに、僕は別な事を考へてたんだ。すまない。併し強くならう、そうしてゐるあなたを見ながら、どうしてこの喜びを否定することができやうか……」私は心の中で二町も離れてゐる哲子に叫んだ。「今の俺には一つの空虛もない。それだけでも充分に救はれてゐるんだ。」

晴れ渡つた空にとどろきながら、午砲が鳴つた。哲子は誰かに呼ばれた様に後をふり向くと、部屋の中に入つたがまた出て来て二三度こつちに頭を下げた。「ちよつと失禮します」そんな事を言つてる様に思はれたが、哲子はそのまゝ姿を消してし

まつた。私はほつと胸が軽くなる様に感じた。「さあ、もう哲子はゐなくなつた。もう歸つていゝんだ。そして歸るなら今だ——心でこう言ひながら、一方にまた、それを否定する心が可成り動いてゐた。今歸つたら俺の方が負けることになる。俺に弱味のあることを彼女に示す様なものだ。今度哲子が出て来てこつちを見てゐる時に歸るんだ。そう、余裕を見せてやるんだ……私は口實ともつかずこんな事を考へて、その台地を下り様としなかつた。

だが一人になると、また自身の事が思はれて來るのだつた。このアブノーマルな行爲を單に情熱と言つたものに全部歸付してしまふことができなかつた。自身の性格の缺陷が當然この行爲に働いてゐるにちがひないと思ふと、もう取り返しのない所まで行つてしまつた様な自分が感じられた。自我とか個性とかそんな肯定的なものに對して今の心は妥協できなかつた。「いけない事をしてゐる」この常識がたえず行爲を不安にし、従つて自分を卑屈にして行くのだつた。それは塗りつぶして塗りつぶしても何時の間にか表面に浸み出て來る意識だつた、何て下らない考へだ……と一時は輕悔しても、次の瞬間にはもうその意識の中に陥つて身うごきもできぬ自分を發見しなければならなかつた。

石の燈籠から下りて、私はしげつたクローバの上に腰を下した。立ちつゞけた疲労が伸した足に鈍く感じられた。十月の上旬とは言へ、澄みきつた空から直射する陽光は、羅紗を通して背に暑かつた。眼下の家並みに續いてすつと遠くまで町の藁が光つてゐた。その街の背後を取り巻いてある低い山の起き伏しの向ふに玄海灘がいくつかの島を浮べながらかすんでゐた。遠い水平線から海の青よりすつと濃い空がきらきら輝きながら颯りでゝゐた。綿をちぎつた様な雲が所々その颯りに沿ひながら流れて來るのが見えた。

ごろりと、あふむけに寢ると、柔い草のタツチが暖いいきれで体を包んだ。陽は帽子の底にさへぎられて、見開いた眼に櫻の紅葉が空の濃藍にしみついた様だつた。あまい喜びに似た感情がだんだん心の中を充たして行つた。「歸らなかつたらこんな喜びが感じられたであらうか。この喜びが味へるだけでも幸福じやないだらうか。この喜びが自分の行爲を残らず肯定して

くればしないか。これでいゝやないか、自分の行爲なんかこの喜びの前には殆どものの數にも入らない程小さいものになつてしまふんだ。——羅紗の焦げつく様なほひを感じながら私は何處か心でさゝやいた。草の上ののびした体がこのまま地の中に入れ入りこんで行きそうだった、青い空だけがいつまでも見えながら……

しばらく寢ころんでゐたが、やがて私は立ちあがつた。そしてまた燈籠の下に来て見ると、もう哲子は二階に出てこつちを頻りに見てゐた。望遠鏡をのぞいては眼をこすつたりするのが可愛くてならなかつた。だがもう歸らうと幾度となく思つたものの、そうしてゐる哲子をそのままに去りかねた。「哲子が見てゐるのに歸つてしまふのは可哀そうだ」私はこんな言譯さへ考へてゐたのだつた。ものの三十分も私達はこうして二町をへだて、顔を合せてゐた。その中に、突然哲子が頭を下げた。そして何度か頭を下げてしまふと、そのまゝ部屋の中に入つてしまつた。ちよつとだしぬけだったので、平手で頬を打たれた様な不満を感じながら、私はにはかにそこを離れかねた。第三者から見れば私自身を想ふと恥しさで一杯だつた。未練がましく何時までもぐつぐつしてゐて終ひに先手を打たれた自分が精いつばいのゝしりたかつた。とうとう哲子にまでおつぽり出されたんだ、見ろ！ひがんだ私の心はともすると最後には孤獨を自分の唯一の味方としやうとするのだつた。「哲子が行つたら、獨りである許りさ……何またきつと出てくるんだ」こん時の隙つぶしにと買つて來た吸へもしない煙草に火をつけながらこう思つてゐた時、ピアノの音が聞えはじめた。靜かな眼下の町にひびきわたるながら、私の耳にも鍵盤の上を動く指が見える様にはつきり聞えて來た。「弾いてるな」と思ひながら、玄關の隣の洋館の窓に眼をやつたが庭の木蔭の爲に窓の中はよく見えなかつた。高い石垣の上にある哲子の家とこの丘との間をささぎるものはなかつたので、音は筒ぬけに私に聞へて來た。練習曲らしい騒々しい音だつた。寧ろやたらにキイを叩きつけてゐる様な音だつた。そしてグリッサンドが何度も試みられた。それがよく彼女が言ふ、「ほんとに癪だわ」。表はさうとする意企の様にさへ思はれた。暖い陽を背に感じながら草の上に伏してその音を聞いてゐるといつか感傷的な私になつてしまつた。喜びとも悲しみともつかぬ氣持がぢつとして居られない様な衝動

をぢりぢりと感じさせた。靴の先きで力いっぱい土を蹴りながら、私は顔を草の上に俯してゐた――。

二人で家をもつ。哲子が弾いてゐるピアノの側でぼんやりそれを聞いてゐる自分――そんなことがふと思はれた。お人好しだなどと思ふと苦々しい微笑が頬に上つて來た。「これでいゝんだ、このまゝ体が土の中にめ入りこんぢまへ――だが哲子を殘していくのはいやだ――馬鹿々々何を考えてるんだ！」断片的な言葉が頭の中に現れてまた消えて行つた、ピアノの音は中々止みそうもなかつた。はじめ程の強さはなくなつたけれど、まだ可成り大きく晝下りの町にひびいてゐた。練習に身が入つて來たらしいその音を私はちつと聞いてゐた。そうしてゐる事が私には、こゝを去らない口實となつてゐる様なわけだつた――

ふと丘の下の方で人聲がしはじめた。そしてその人達は段々この台地に近づいてくる様子だつた。悪い豫感をもつて人を恐れる意識が突然起つて來た。「何も悪い事はしてゐない」と思ふはしから、あの後めたい感じが心の落つきを失はせて行つた。漠然とした反抗を感じながら、私はどんな奴が上つて來るか、上り口の所をふり返つてゐた。聲がすぐ間近かに起ると、どやどやと六人の男が上つて來た。今更「悪いな」と思つたものももう私は腹を決めてゐた。できるだけ無關心をよそつてゐよう、その積りで私はすぐに頭をもどして私の眼が彼等の視線にぶつつかると、また煙草に火をつけた。切角ひとりでいゝ氣持になつてゐたのに、この不意の浸入者の爲に中斷せられたのがいまいましかつた。併し平氣をよそふ一方に、私はできるだけの注意をその男達に向けてゐた。警戒――この感情が本能的に頭の中で渦まいた。自分の弱味から、その男達と自分を關係づけやうとする愚劣をわらひながら、いつのまにか硬くなつて來た感情をどうすることもできなかつた。私は洋館の窓を見ることがさへその男達に對してはゞかられたのだつた。――

台地上つて來た六人の男達はしばらく歩きながら話してゐる中に、段々私の後に近づいて來た様だつた。「まづいな」と思つた途端――

『君はどこかね！』

私は勿論、これが私に呼びかけられたものと思はなかつたので、その聲にふりむかなかつたが、これが再び繰り返へされた時思はず首を後にひねつて、はじめてその男達をはつきりと眺めた。厚司を着たり、前掛をしてたりしてゐる、一見下つぱの相場師の様な風体の男が四人私の傍近くに立つてゐた。

『君の家はどこかね!』

四人の中で一ばん年かさらしい四十位の男が、聲はやさしかつたが、烏打帽の下から鋭い眼でじろじろ見ながらも一度言つた。不吉な豫想が思ひかけなく實現して來たのに漠然とした不安を感じながら私は返事ができなかつた。何の爲に私の家をつねたりするのか皆目わからなかつた。そしてそんなことを憶而もなくづけつけ言ふその男に對する憎悪と反抗が起つて來た。私はその男を見かへりながら返事を與へなかつた。

『君は一人かね!』

その男は明らかに私の心がわかつた様に、幾分か聲を和けて言つた。「何て失禮な奴だらう」と思ひながら、私は顔一ぱいに憎悪と不満を浮べて

『えゝ、一人です』

一人がどうしたんだと言ひたかつたが、こう口を切つた時私の聲は震ひをおびてゐた。「何が恐ろしいのだ、お前の聲は震へてるじやないか。くそ!、まけるものか」棄て鉢な反抗と自己嫌悪とが心の中ではげしく交り合つた。

『こゝはどこかね!』

その次に男がこう問ひかけた時、私はその言葉を本當にとつた。「何だこの男達はこの町にはじめて來たのか」——私はほつと安心しながら言つた。

『こゝはY町つて言ふんでせう』

氣輕に言つてのけたものの、私は言葉尻を濁した。私はなるべくこの男達との交渉を避け様と思つたし、またY町——哲子の居る眼下の町——と口に出すのが何とはなしに後めたく感じたからだつた。それにしてもこの男達は土地の者の様だつた。それは言葉のなまりやまたその風体で充分にわかつてゐたが、私は何となく油斷ができないものをこの男達に感じてゐた。その時だつた。——

『君の家はどこだ！』

不意を打たれた氣味だつた。私はまたふり返つてその男を見た。鋭い眼が眞劍味をおびてちつと私の上に注がれてゐた。私はますます解らなかつた。「まさか、哲子の事を知つてゐるんじやあるまい」と思ふものゝ不安だつた。恐喝か？ それにしては相手の人數があまりに多すぎたし、その男達が「不良青年」といふ言葉に適はしくない風采だつた。私は自分の家のことを言ふ必要をみとめなかつた。況んや家に内緒で歸つてゐる私は家のことを口に出すのさへいやだつた。

『僕の家はこの山の向ふだ！』

体をひねつて後を向きながら私は丘の後側に見えてゐる町をぼんやりと指した。自分の聲を泣き聲の様に感じながら——。

『向ふつてどこだ！』

男は急に積極的に迫つて來た。「何！」と叫びたかたつが聲が出なかつた。むづかゆい様な壓迫が全身を痙攣させる様だつた『海に近い町です。』

『何町か問ふてるんだ！』

不貞くされてやれ！。おしげを感じながらふり返へると、男の怒氣を含んだ顔が近くにあつた。私は返事をしなかつた。ぴんと張り切つた心の隅に、不思議にけだるい様なゆとりがあつた。そして私の耳に思ひ出した様に哲子のピアノの音が聞えはじめた。「お前達のことなんかにかゝつちやゐられない」私はひそかに心で言つた。

『君のおとつ、つあんは何をしてゐるかね。』

しばらくの沈黙の後でまた男が口を切つた。私の不貞くされを見てとつたらしくおだやかに話をうつす様だつた。彼等の素性が私にはどうしてもわからなかつた。私の父にこの見知らない男達が交渉をもつてるとはとても思はれなかつた。

『別に何もしやしない』

辛じてこれだけ言へた。その時

『身分証明書を持つてゐたらう、見せ給へ』

この男達がどんな身柄のものか漸く判然として來た。「若しや……」と思ひながら、懷中から身分証明書をとり出して、黙つてその眼の鋭い男の手に渡した。四人がしばらくそれを見て何か小聲で言つてゐる様だつた。不安が段々薄らいで行つた。笑ひたい様な氣持になりながら、また、煙草に火をつけた。最後の虚勢を張るために——多少そんな氣がしなくてもなかつたが、ピアノがまたきこえて來た「哲子しつかり弾いておくれ、今こいつ等をとつちめてやるんだから」と私は叫びたくなくなつてゐた。……

『今は、學校は休みかね？』

身分証明書を私に返しながらその男は言つたが、もう詰問する様な調子が消えてゐた。「もう大丈夫」と思ふと、私には何時か相手の軟化に乗じて、それに甘へたい様な心があつた。それが意識にのぼるのを不快に思ひながら——

『え、今日は僕の學校の運動會で明日は休みなんです。高等學校の運動會なんてつまらないから歸つて來たんです。——』
私はもつと言ひ續けて行きたかつた。今話したら能辯になれる自分を感じながら。がこう言つた時、眼の鋭い男がひき取つて言つた。

『實は——僕は警察の者だが、今さきその店で學生の食ひ逃げがあつたんでそいつを探してたんだ。ひよつとここに、

も来てやしないかと思つて上つて見ると君が一人こゝにゐたからちよつと訊ねて見たんだ。決して悪く思はないでくれ給へ。そいつも一人だつて言ふもんだからね。つい君に訊ねたんだ。始めから警察の者だと言ふと知つてることでもかくす様になるから今までだまつてたんだ、まあ職務だから——』

こんなことをその男が長たらしく言ふのを聞きながら、私はふと活動で官憲が服の襟を返してパッチを見せるのを思ひ出したりしてゐた。やつぱり刑事だつたんだ——そう思ふと四人が私の傍に立つており、後二人が丘の上り口と私の左手に少しはなれて立つてゐるのが今更わかつた様な気がした。

『誰かこゝへ來なかつたかね』

『さつき上つたんだから——(私は思はず嘘を言つてしまつた)——よく知らないが、僕が來てからは誰も來ませんよ。併しはじめからそう高壓的に出られると不愉快だな』

「今は俺の方が勝つてるんだ」この意識を私はもつと高潮したかつた。それは虚勢だつたが——。そして今幾分でもこつちから攻勢に出ることによつてその刷け口を見出した様な形だつた。そのくせ聲はまだ昂奮の爲にふるへてゐた。

『だから言つてるだらう。職務だから仕方がないんだ。決して悪く思はないで……』

完全に勝つたと思ふともう返事もしなかつた。六人の視線を背中に感じながら、こうして相手を無視してやるのが快かつた『君が法學士になつても法學博士になつても、やつぱり一應は問ふて見るんだからね、』

今一人の刑事が私の側にかゝむと、こう言つて煙草の火を借りに來た。その明らかなおべつかが一層私の勝利心をてゝつて行つた。

軽い興奮がやゝもすると心の落着きをなくしそつた。煙草をやけに吸つてゐる中に、自意識が不明瞭になるのを感じた『今俺は何をしてゐるのだつたけ』そしてだんだんぼんやりとなつて來た。自分の實在をしつかり掴もうとする心が強く動

いてゐた。

『や、どうも失敬した』

こう言つて私の傍をはなれると、六人が一所に集つて何かひそひそ話してゐたが、間もなく丘の上から姿を消してしまつた。私はそれを黙つて見てゐた。

もとの静けさが台地にやつて來た時、私はほつとしながら草の上に向つむきに寝た。踏まれた草の起きる音がかすかにしてゐた。うづうづする様な誇らかな氣持が突然おし寄せて來た。勝つた！確かに勝つた。しかも哲子のこんなに近くにゐながら彼女が弾くピアノの音を聞きながら勝つたんだ。哲子！あなたは僕がこんなに美事に勝つたのを知らないのか、どんなに僕が騎士的であつたか！あなたに見せたかつた。

安堵と勝利の意識が遂に私を宇頂天にした。何でもないこの出來事を私は強ひて私達の戀愛そのものに對するインタラプシヨンとまで考へたい様になつてゐた。それは私の心のローマンテイズムを満足させるのにより効果的だつたから。

「食ひ逃げはよかつた。だが俺は今とにかくいゝ事はしてゐないのだ。それを彼等はとうとうわからずに行つちまつたじやないか。結局俺の心は俺だけのものなんだ——。フン何て氣まぐれな現實だ」

勝利と冷笑とを交へたいはゞ悪魔的な歡喜が頭にうかんで來た。一つの秘密が困難を切りぬけて完全に保たれた時に感じるだらう喜びだつた。

「強くなるんだ！もう俺の行爲を全部肯定してしまふんだ。現に彼等は俺を咎めなかつたじやないか、何故か、それが他人に、少なくとも第三者に干渉を持つて居なかつたからだ。俺の行爲を彼等はすでに肯定してゐるじやないか」

私はそこで眼を木蔭に見える洋館の窓にやつた。ピアノの音はそこから抜け出して、降る陽光の中を、尙この丘まで聞えて來た。ゆるやかな「舟唄」のリズムが眼下の蕘の間を縫ふ様に泳いだ。いまこそ幸福に浸り切る事ができるのだ——喜びの

アクメーだが私の眼頭はあつくなつて來た。眼下の藁がかすみ、木立がかすみ、洋館の窓がかすんで行つた。なまぬるい觸感が頬を傳ふと泪がぼたりとクローバの一つの葉を重くおさへた。昨日から今日にかけての色々な事が頭の中を次々に過ぎて行つた。その一つ一つの事が皆私に必然的なものに思へた。そして今——いくら拂ひのけても何時の間にかまだしつかり私自身の上からみついてゐるある茫漠とした廣いものが感じられた。何時でも、影の様に私につきまといつて何處からか私を見まもつてゐるものがぼんやり姿を現はさうとしてゐた。未だ若い私の「人生」の中にすでに巻き込まれて揉まれてゐる私自身の小さい姿がはつきりと見られた。未知の前途に對する漠然とした不安と恐怖が一瞬間頭をよぎつたが、次の瞬間「人生」の前で恐怖に震へてゐる「私自身」の姿が堪らなくとしかつた。そして堪らなくさびしかつた。

『泣くんじやない……これが人生なんだ……今生きてるんだ……』

こうつぶやいた口が突然引きつた。涙が止めなく流れ出た。クローバの葉が顔の下でかすかに動いた。

十月の陽の温みの中に、頬を傳ふ涙の跡の冷たさを感じながら、私はぼんやりと洋館の窓から響いて來る「舟唄」の流れを聞いてゐた——。

——昭和二年一月二十一日夜——